

# 学生の多文化共生意識の育成に向けて —小学校におけるクラブ活動への参加から—

林 朝 子

**For the Development of Students' Multicultural Coexistence Consciousness:  
Through Participation in Club Activity of Elementary School**

Asako HAYASHI

## 要 旨

現在、日本国内は多文化多言語な空間となりつつあり、学校現場にも外国人の子どもたちが多く在籍し、教育上の問題点は多岐に渡っている。本稿では、学校現場において「多文化共生」意識を持つことが教育上の問題解決の支えの一つとなると考え、小学校のクラブ参加と振り返りを繰り返すことで、教員志望の学生に対する「多文化共生」意識の育成を試みた。

## はじめに

本稿では、教員を目指す学生が「多文化共生」<sup>1)</sup>の意識を持つための試みとしての一活動の提示と共に、活動の意義について述べる。出入国管理及び難民認定法（入管法）が1989年に改訂・1990年に施行され、日系人の就労の自由が認められたために、日本への定住が増え始めた。その結果、現在の日本には多様な言語や文化を背景に持つ外国人市民<sup>2)</sup>と日本人市民が共に生きる環境、つまり「多文化共生」が広がりつつあり、その中で我々は日常生活を送っている。しかし、実際に我々が本当の意味での「多文化共生」を捉えた上で、外国人市民と共に生活を行えているかは疑わしい。

さらに、学校の教育現場では年々外国人の子どもたち<sup>3)</sup>が増加し、教育保障の観点からも外国人の子どもたちに対する教育は非常に大きな問題となっている。日本語指導が必要な子どもたちも多く存在している<sup>4)</sup>が、そのような子どもが少数しかいない学校には日本語指導のための専任教員が特別に加配されることはない。しかし、たとえ日本語指導が十分に行える環境があったとしても、教科学習への移行がスムーズに進むわけではない。生活言語能力と学習言語能力が異なる言語能力であるためであるが、学習言語能力までを十分身に付けられず、全く教科学習についていけない子どもたちが看過されていることも多い。そして、外国人の子どもや日本の子どもの間には、言語や文化における相互の誤解に端を発し、偏見やいじめが生じているケースも少なくない。しかし、このような「多文化共生」が急速に進む学校現場の多岐に渡る問題に対して、日本語指導の専任教員や一部の国際担当教員だけではとても対応ができない。学校現場を本当の意味での「多文化共生」空間にできれば、自然と学校内での全教員・全子どもが協力し合う気持ち生まれ、学校を協働の場所へと導けるはずである<sup>5)</sup>。

以上の点から、教員を志望している学生（以下、学生）が「多文化共生」意識を持つことは非常に意義のあることであり、今後の学校現場においては必須の認識であると言える。しかし、実際に学生に「多文化共生とは何か？」と質問をしてみると、「表現そのものを初めて聞いた」という反応が多く、地

域、特に学校現場の多文化共生を考えたことがない学生が大半を占めていた。そこで、学生に小学校のクラブ活動への参加を通し、「多文化共生」とは何かを考え、意識づけさせるために本取り組みを行った。以下では、クラブ参加と振り返りを繰り返すことで、学生がどのように多文化共生について考えをめぐらせ、深められたかについて提示を行う。なお、今回の取り組みでは、省察的実践の考え<sup>6)</sup>に基づき、クラブという実践に参加し、レポートと大学授業内での振り返りにおいて、考えを言葉で表現していく方法を取り入れ、学生の気づきの変化を促した。

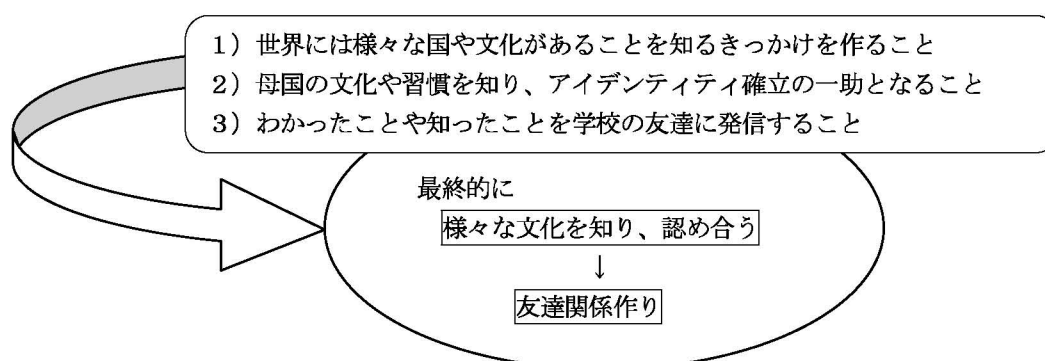
## 1. 取り組み方法

本取り組みには、2008年度後期開講授業の一環として、学生14名（1年生）が参加した。I小学校「世界を結ぼうクラブ」（以下、クラブ）に計5回の参加とその前後にはレポート作成と振り返りを行った。以下で、詳しく記す。

### 1-1. I小学校「世界を結ぼう」クラブについて

I小学校には常に20名前後の外国人児童が在籍しており、学校環境が多文化である。そのような中で多文化共生の意識を子どもたちに自然に持ってもらおうという考えの基、設けられたクラブである。クラブ担当教員は2名で、内1名はポルトガル語での日本語指導教員S先生（日系ブラジル人）である。2008年度のクラブ参加児童は、4年生16名で外国人児童は0名であった。クラブ活動は、5～7月、10月～2月に各1回ずつ、合計8回行われた。

### 1-2. クラブの目的



【図1：クラブの目的】

以前から、外国人の子どもたちの居場所作りという活動は多く行われている。しかし、I小学校でのクラブ活動は、外国人・日本人という枠組みに関係なく、子どもが積極的に活動に参加し、その活動を通し様々な文化を知り、認め合い、友達関係を築くことまでを視野に入れている点で注目に値するであろう。

### 1-3. クラブの活動内容

以下にクラブの活動内容について簡単に記す。クラブではI小学校の2名の教員が中心となり、活動を進めた。なお、2008年度はブラジルを中心にとりあげた活動内容である。

【表1：クラブ活動内容】

回	月	活動タイトル	活 動 内 容	学 生 の 参加方法
1	5	クラブ名を決めよう	子どもたちが話し合い、クラブ名を「世界を結ぼう」クラブと決めた。	
2	6	ブラジルについて知ろう	ブラジルの友達に手紙を書く前に、ブラジルについて知る。家族の人に聞いたり、本やニュースを見たり、S先生に聞いたりした。	
3	7	手紙を書こう	ブラジルの日本人学校の友達に日本の学校生活や習慣について手紙を書く。(後日、ブラジルからも返事が届く)	
4	10	日本を知ってもらおう	夏休みの間に各自インスタントカメラでブラジルでは珍しいと思うものを写真に取り、それに説明をつけてブラジルの友達に送る。	支援型
5	11	みんなで歌おう	ブラジルの「ねこに棒をなげた」という歌を歌った。ポルトガル語も少し体験した。	協同参加型
6	12	S先生ってどんな先生?	先生からブラジルの話を聞き、それについて色々質問をした。	観察型 協同参加型
7	1	ダンスを踊ろう	ブラジルの「POPPOP (ポピポピ)」という楽しい曲に合わせて、皆で踊った。	協同参加型
8	2	お菓子を作ろう	ブラジルのお菓子(ココナッツ味とチョコレート味の団子のようなもの)を皆で作って、食べた。	協同参加型
その他		クラブ活動の様子を紹介するポスターを作り、小学校内の祭の時に掲示した。		

#### 1-4. 学生のクラブ参加の目的と意義・授業の流れ

クラブ参加目的は学生が1) 外国人の子どもたちが学校現場にたくさんいることを知り、2) こどもたちを取り巻く問題を考え、3) 問題解決のための軸となる「多文化共生とは何か」を認識することである。意義は学生が実際に教員になった場合に、「多文化共生」の意識を持っていることで、子どもたちの国籍や言語にとらわれずに全ての子どもたちに接し、「多文化共生」意識を学級、学校へと広げていく基盤を支える役割を担える点である。

クラブ参加前には、教員からの多文化共生に関する知識提供は行わず、5回のクラブ参加と振り返りを通して、学生自身の「多文化共生とは何か」を導いた。

クラブ参加と大学での授業の関係であるが、クラブ参加の前週には、クラブ時の活動内容について確認と参加方法について話し合った。クラブの翌週には、毎回、レポート提出と振り返りの授業を行った(最終のクラブ後は振り返り授業は行わなかった)。振り返りでは、各自の意見や考えの交換の場となった。〔参加⇒小レポート⇒振り返り〕というサイクルを4回繰り返す(まとめとして最終レポートも課した)ことで、自らの気づきを言葉で表現し、お互いに伝え合い、さらに自身の考えを深める流れとなった。

#### 1-5. 学生のクラブ参加方法

表1に学生の参加方法を示したように、クラブの活動内容によって、参加の形態は次の3パターンに分かれた。

- 1) 観察型：教室の先生と子どもたちの様子を見て学ぶ
- 2) 支援型：子どもたちの学習作業に対する手助けをしながら学ぶ
- 3) 協同参加型：子どもたちと一緒に活動しながら学ぶ

クラブに参加した学生が1年生で小学校児童と接することに慣れていない者が多く、学生の振り返り

では、支援型での接触が最も難しかったことが窺える。

【学生 T1】 全員を見るということの大きさと難しさを痛感した。児童一人一人にペースがあり、得意不得意がある。同じ子は一人も居ない。その中でなかなか作業が進まない児童も出てくる。そうした時に、こういった指導が適切なのだろうか。

【学生 T2】 もっと積極的に子どもたちに話しかければよかった。

## 2. 振り返り内容の考察

クラブ活動後のレポートと振り返り授業での発言を中心に、学生の多文化共生に対する意識や考え方を詳しく見ていく。2月のクラブ最終回はレポート提出・振り返り授業を行うことができなかつたため、10～1月の4回分について取り上げる。

【10月：日本を知ってもらおう】

活動内容：

ブラジルの日本語学校の友達に、日本の様子を写真とコメントで伝える活動。夏休み前にクラブの児童全員にインスタントカメラを配布し、夏休み中にブラジルに紹介したいものを撮ってくるように指示した。児童が撮ったものは、I小学校の近くにあるお寺や学校の中の様子（げた箱や傘立てなど）であった。子どもたちの視点からの伝えたいものがわかる興味深いものであった。

学生の参加：

支援型であったが、写真へのコメントが全く書けない児童にどのように指導していいのか、どの程度まで教えていいのか苦心したようである。

学生のコメント：

【学生 K】 世界を知ると同時に、日本の文化というものも学んでほしいと思う。／子どもたちがいったい外国のことをどのように認識しているのか興味があるので聞いてみたい。

【学生 M】 ある男の子の「そうか、日本語でいいのか。べつに英語で書く必要ないんやな!」という発言は私を驚かせた。

【学生 S】 ブラジルの日本語学校の子どもに送るということで、それを書いている子の独自の判断で、難しいと思う漢字には振り仮名をふっている子もいた。

【学生 H】 小学生は多文化理解や多文化共生ということを考えているのではなく、単純にブラジルの子どもたちと仲良くなりたいという気持ちで取り組んでいたのかもしれない。

[10月：コメントのまとめ]

①母国・母文化（日本・日本文化）を知る必要：

子どもたちには海外のことを知るだけでなく、外に発信するには母国・母文化のことを知る必要がある。

②母文化を伝えたい気持ちの自然発生：

子どもたちは母文化を紹介する意識を自然に持っていた。

③歴史的背景を知る必要性：

日本に外国人の子どもたちが増えたり、海外に日本語を話す子どもたちがいる歴史的な理由を知る必要がある。

④友達関係作りの意識：

友達として仲良くなりたい気持ち、友達の苦手な部分を支援したい気持ちが必要である。

【11月：みんなで歌おう】

活動内容：

ポルトガル語に接することを中心に取り上げた活動。S先生にポルトガル語での挨拶と自己紹介を教えていただき、それらを全員で覚えた後、クラブに参加している全員でお互いに挨拶と自己紹介を行った。その後、今回のメイン活動であるブラジルの歌「猫に棒を投げた」の導入として、まず、動物の鳴き声紹介があり、ブラジルと日本の動物の鳴き声が異なることを知る。そして、歌の導入後、全員で輪になって踊りながら歌を歌った。クラブの最後の方には口ずさめるようになっていた児童もいた。ブラジル人児童2名も参加<sup>7)</sup>。

学生の参加：

協同参加型で、児童とポルトガル語で直接自己紹介をしたり、一緒に手をつないで踊ったりした。ポルトガル語や歌の予習はしていたが、学生にとっても新しいもので、新しいことを一緒に行うことで、児童との距離が縮まり、より感じたことも多かったようである。

学生のコメント：

- 【学生 I】 子どもたちもポルトガル語に興味を持って「やろう!」という気が窺えた。ポルトガル語、つまり、新しく接する異文化に興味を持っていた。／異文化に接し、日本語つまり自分の国の言葉との違う点を（ブラジル国籍の子も自主的に参加し）一緒に交じって、お互いの文化を認め合う心を子どもたちも学んだと思う。ブラジルの文化に接することで、子どもたちはブラジルのことを身近に感じるようになると思った。
- 【学生 K】 男の子が立ち歩いているいろいろな人に聞きに行っていたのには驚いた。／（ポルトガルと日本の動物の鳴き声の比較について）何かを比較していくことで、楽しく知らない文化を理解できるかもしれない。
- 【学生 T2】 （ブラジルと日本の子どもたちが）何かもっとお互い分かり合えるような改善策はないかと考えたが、やはり今回の授業のように少しずつブラジルのことを学び、体でブラジルの文化を体感するというのが一番良いと思う。
- 【学生 H1】 実際にポルトガル語を話してみたり、聞いたりすることに対して、子どもたちは興味を持った表情で活動しているように思った。やはり、今まで知らなかったことを知るということは、子どもたちにとって新鮮でよい刺激になるだろう。
- 【学生 H2】 今後も五感や体全体を使って異文化を理解し、実際に楽しむ活動ができれば良いと思った。

[11月：コメントのまとめ]

主体的な異文化体験の大切さ：

文化が異なることを楽しく体験できれば、異文化を身近に感じ、お互いが分かり合えるきっかけとなる。

【12月：S先生ってどんな先生？】

活動内容：

今までの活動を皆で思い出しながらおさらいし、児童の意識をブラジルに向けた。その後、S先生から自身の歴史、ブラジルの話（食文化、学校の様子など）、ブラジルから来ている子どもたちの問題などを聞き、その内容や浮かんだ疑問点をS先生に児童が質問した。児童の質問を更に深める形で、学生からも質問をした。

学生の参加：

前半は児童とS先生のやりとりを見ている観察型であったが、後半は児童と共に質問を行い、協同参加型といえる。

学生のコメント：

【学生 T1】 ブラジルについての理解が中心で、机に座っている時間だったにもかかわらず、子どもたちは比較的生き生きしてみえた。やはり、未知のものを知る楽しさは年齢に関係ないのだろう。/S先生の「どんな顔をしている？」という質問に、「何をもって日本人とするのか」という疑問が生まれた。/人種や国籍について考えさせられた。

【学生 K】 みんな予想以上に興味津々で、机に座る授業形式であったが、ある程度集中できていたように思う。

【学生 M】 他国の文化を知ることは自国のことを再認識する良いきっかけとなる。

【学生 H1】 ブラジルという日本から遠い国について新しいことを学ぶことは、子どもたちにとって新鮮で刺激的なことなのだと思う。/(学校でのブラジルの子どもたちの様子は)子どもたちも、S先生の話聞いて驚いている様子であった。子どもたちにとって、そういう現状を知るといことはすごく重要なことだと思う。S先生の話聞いて、今、同じ小学校にいる外国の子どもたちがどのような状況で授業を受けているのか分かったに違いない。また、こういうことを知っているか知らないかで、クラブ活動に対する意識もまた変わってくるかもしれない。

【学生 S】 S先生から、「何故ブラジルに日本語学校があるのか？」などという日本とブラジルの関係について質問が出されたとき、子どもたち同士で、理由を考えてお互いに議論していた。

[12月：コメントのまとめ]

見えない部分を理解することの大切さ：

外見、国籍、～人、普段の様子（例えば、学校で楽しそうにしているなど）では分からない潜在的な部分が多い。

【1月：ダンスを踊ろう】

活動内容：

ブラジル文化の明るさに触れることを中心に取り上げた活動。11月の活動で「猫に棒を投げた」という歌を歌ったが、今回は、より楽しくブラジルを感じてもらおうと、「POP POP（ポピポピ）」を取り上げ、歌、楽器、ダンスを楽しんだ。ブラジル人児童2名も参加。

学生の参加：

協同参加型で、児童も学生に慣れてきたようで、児童から学生に「一緒に踊ろう」と声をかける様子も見られた。

学生のコメント：

【学生 H2】（特別参加の）ブラジル出身の二人が踊っていた姿などを見て、母国愛というようなものを強く感じた。「日本の文化」「日本人らしさ」を彼女たちに押し付ける教育はよくないと思った。/(日本語ができないことは)問題視されている。日本で生活していくなら克服してもらいたい問題だが、そうすると「日本語使用」を強要しているのではないかと考えられ難しい。/日本もブラジルも彼女たちにとって、両方母国のように愛着を

持ってもらいたいし、理解してもらいたい。だからこそ、このクラブでたくさんの日本人の子どもたちと触れ合ってほしいなあと改めて感じた。

【学生 T1】 他文化を知るゲストがただ他文化を披露するだけでは、相互理解につながらないという意見もあった。しかし、果たしてそうだろうか。確かに、他文化を教える側と教わる側との関わりが一過性となってしまえば、相互の理解に繋がらない。しかし、他文化を知るきっかけにはなるだろう。これから考えていかなければならないのは、どのようにして一過性に留めないかという事だろう。／(一過性にしないために) 音楽をはじめとしたツールを利用して児童たちが一丸となって楽しめる活動にする必要がある。／他文化としている時点で、それ自体を自分たちのものとは違う、いわゆる“特別”なものとして意識しているといえる。それは決して悪い事ではないはずだ。自分ではない他を認識しなければ、相互理解などあり得ない。他文化であるという前提から、相互の文化理解が始まるのである。

【学生 I】 「多文化共生」に至るには、その人の属する集団共通の文化を理解する以前に、その人個人の特性を知る（個人の持つ異文化を互いに理解する）こと、受け容れることが重要になるということを理解した。

【学生 K】 異文化を知るには、自分の文化をしっかりと知ることが大切だと思う。教え合いを提案したい。

[1月：コメントのまとめ]

①文化に違いはあるが差はない：

自文化と他文化に違いがあるのは当然だが、どちらかを一方的に受容させるべきではない。

②一過性にしない：真の相互理解には一過性の活動だけでは不十分である。

③個人と個人の関係作り：

一個人が持っている文化を相互に理解することが、全体的な多文化共生につながる。

【2月：お菓子を作ろう】

活動内容：

お菓子作りでブラジルの食文化を体験し、食文化の違いを考える活動。も参加。材料はブラジルから輸入されたものを使ったので、入っていた容器などからも異国を感じていたようである。ブラジル人児童2名も参加。

学生の参加：

協同参加型で、一緒にお菓子を作るという作業でとても楽しく行っていたようである。

学生のコメント：

【学生 M1】 「やりたい」授業は彼らに興味を抱かせることができる。そこから「知りたい」と思うのはすぐだ。お菓子作りのときにお菓子の上に乗せる植物のことは、児童が真っ先に「これなに」と質問していた。実際は食べなくていいらしいが全員食べた。とても苦かった。おそらく児童たちは一生忘れないだろう。自分から「知りたい」、「やりたい」と思ったことによる体験は、彼らの心に残り続ける。「やりたい」と思える授業にはこのような機会が多くある。積極的な姿勢がそのまま「知りたい」となりいつのまにか「多文化」のことを理解している。この前向きな姿勢が「共生」だと私は考える。

[2月：コメントのまとめ]

知りたいという気持ちが大切：知りたいと思わなければ、理解につながらない。

### 3. 学生の「多文化共生」に対する意識

前述したように、S小学校でのクラブ活動参加の最終的な目的は、学生各自が「多文化共生」について考えることであった。ここでは、計5回のクラブ活動参加と4回のレポート提出と振り返り授業を通し、最終的に学生が「多文化共生」についてどのような意識を持ったかについて触れたい。

#### 3-1. 学生の考える「多文化共生」

最終レポートでは、学生自身が一連の活動を通して考えた「多文化共生」について記述してもらった。その中で、彼らが考える「多文化共生」について端的にまとめられている部分を紹介する。

【学生 H2】 「多文化共生」とは、さまざまな国の子どもたちがお互いにそれぞれの文化・慣習などを尊重しあい、同じ空間の中でおのおのが心よく共存しあえることだと私は考えます。

【学生 T2】 私は「多文化共生教育」とは「互いの国の文化を知る」というだけでなく、「互いの国の文化において共存し、理解する」ということが大事なのではないだろうかと思う。しかし、「理解」といってもどこからが「理解」なのかという範囲を決めるのはあいまいで難しい。しかし、「共存」ならそれよりも容易にできるのではないだろうか。つまり、このクラブのようにまず1つの文化（このクラブの場合ブラジルの文化）に一方の文化を持つ者が触れ、そしてそれを共有する。そこから自分にはルーツのない文化を実感し、その文化について考える。そこから「理解」というものが初めて生まれてくるのではないだろうかと思う。／私の考える「多文化共生教育」は、まず「お互いの国の文化を知りたい」という意思をお互いが持つことから始まる。それからその文化において「共存」する。そこから「理解」が生まれるというものである。

【学生 T1】 多文化共生とは、多くの異なる文化と、「共に生きる」事であると、私は考えている。“多くの異なる文化が1つになる”という認識ではなく、文字通り「共に生きる」、「解り合う」という認識が必要なのである。異なるものが1つになろうとすれば、どうしても障りが生じてしまう。それ故に、お互いが認め合う事が何より大切なのである。多くの文化が認め合い共存する、そういった世界に欠かせない秩序を、多文化共生と呼びたい。

【学生 S1】 多文化共生とは「国籍や民族の違う人々が、お互いの文化を認め合いながら、対等な関係で共に生活していくこと」である。

【学生 K】 このクラブに見学参加するまで、「多文化共生」とは自分たちの文化を我慢し合うことのように思っていた。しかし、確かに我慢することも時には必要だと思うが、何より認め合うことが大切なのだと今は思っている。そのために私たちは、日本人と外国人が互いを認め合い尊重し合える多文化共生教育を目指すべきなのではないかと思う。

【学生 H3】 「多文化共生」は単に普段している共生を文化の違いという点まで視点を広げたものであると私は考える。そのため「多文化共生」は別に特別なことをしようとしなくてもよいと思う。今まで自分が行ってきた人と接する方法を、異なる文化を持つ人たちに対し



でもそのまま実践すればそれでよいのではないか。／同じ日本人であっても細かく見ていけば地域によって文化の違いはあるはずであり、大学など様々な地域から人が集まってくる場所では気に留めることは無くとも常に「多文化共生」が存在しているといえる。／外国の文化との「多文化共生」となると、言語の違いがあるため困難さが増すかもしれないが、人と人との関わりの中での対話から生まれるという点では基本的に同じであると思う。

【学生 S2】「多文化共生」とは、異国の文化に触れ相互に理解し合い、その上で個人としてのアイデンティティを認め付き合っていくということだと考える。／「多文化共生」とは教育すべきことというよりも、自然と個人の間で行われていくのが本来の姿なのではないかと私は考える。自然と行われるはずのものであるからこそ、敢えて教育となると難しい。

【学生 M1】「多文化共生」について感じたこと、それは相手のことを「知りたい」と思うことが大切だということだ。

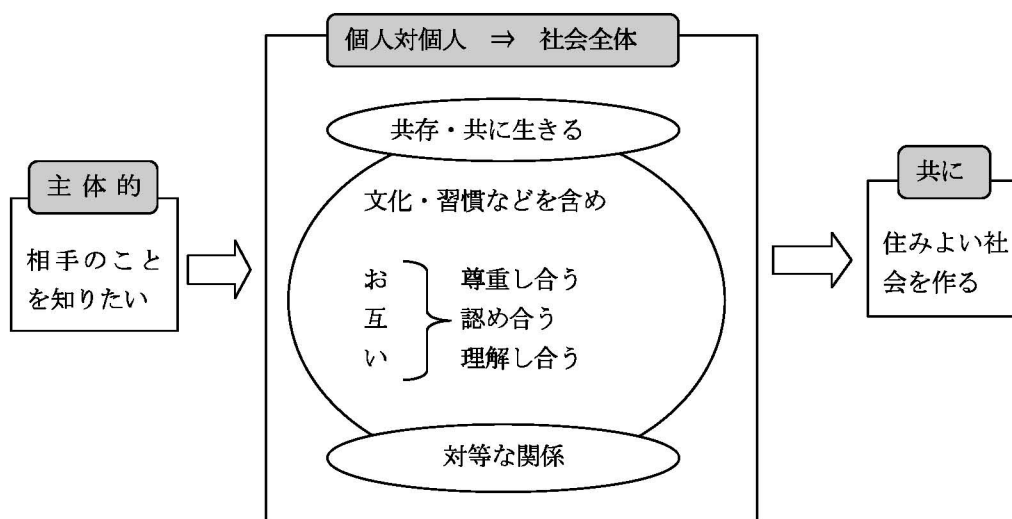
【学生 O】「多文化共生」とは、いろいろな国籍・文化・身体的な特徴をもった人々が、互いに理解し合いながら、共に住みよい社会をつかっていこうとする考え方を表す言葉である。

【学生 M2】「多文化」とは異なる文化を持つグループが「対等な」立場で構成、もしくは許容・包容されている状態のことであり、それを「共生」とつなぎ合わせると、「国籍や民族などの異なるグループの人々が、互いの文化的違いを認め合い、許容し合い、「対等な」関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」と定義できる。

### 3-2. 学生の考える多文化共生の図式化

最終レポートの多文化共生についての記述と計4回のクラブ毎のレポートと振り返り授業でのコメント内容からキーワードを抜き出し、学生が考えた多文化共生を総合して図式化する。

各学生によって、多文化共生に関する考え方は多様であり、細かい点では差異がある。しかし、彼らの考えた内容からキーワードを抽出し、総合することで、今回のクラブ参加を通じた結果の「多文化共生」が提示できると考えた。



【図2：学生が考える多文化共生】

学生が考える多文化共生を総合し、図式化した。彼らの考えによる多文化共生は以下のようにまとめられるであろう。

- 1) 「主体的」な「相手」への関心興味から出発し、
- 2) お互いの文化や習慣などを知ろうとし、
- 3) お互いに尊重し合う・認め合う・理解し合うようになり、
- 4) 対等な関係作りができ、共存につながり、
- 5) それが社会全体へと広がり、
- 6) 「共に」「住みよい社会」を作ることである。

これまでの多文化共生に対する考え方は、2)～5)の考え方が主流であったが、今回の取り組みを通し、国籍や文化には関係なく、個人的な相手への興味関心に基づく「主体的」な関わりからスタートし、最終的に「住みよい」社会を「共に」形成していくという統合的な意識が持てたと言えるだろう。

#### 4. まとめと今後の課題

本稿では小学校でのクラブ参加を通し、多文化共生に関する知識がほとんどない学生が多文化共生についてどのような考え方を思い出せるのかに注目した取り組みを取り上げた。本取り組みを通じ、学生自身の中から多文化共生に対する統合的な認識を得られたことが示唆できるであろう。多文化共生が進む中、どのような学校現場であっても多文化多言語の背景を持った子どもたちに出会うはずである。今回の取り組みを通し獲得した多文化共生の考え方は、教育活動に携わろうとしている学生にとっては必須の認識であろう。しかし、今回の一連の取り組みの中では、彼らが捉えた多文化共生の意識を実際の教育上でどのように子どもたちに伝えられるのかという実践方法にまではつなげられていない。今後の課題としたい。

#### 注

- 1) 「多文化共生」ということばの使用は、1985年に出版された『多文化教育の比較研究』がきっかけとされる。やがて、90年代に入り、外国籍住民が多く居住する自治体などを中心に「多文化共生」ということばが使用され始め、2005年に総務省が「多文化共生社会を目指した取り組み等を推進するなど、人と自然にやさしい地域社会づくりを推進する」と述べ、初めて「多文化共生」ということばを公式に用いている。(2008 野山)
- 2)3) 本稿で使用する「外国人」は、国籍に基づく判断ではなく、「外国に何らかのつながりを持つ人」という意味で使用する。現在では、「外国系市民」「外国につながる子どもたち」「外国にルーツを持つ子どもたち」「移動する子どもたち」など様々な表現が用いられている。
- 4) 日本国内の公立小・中・高等学校、中等教育学校及び特別支援学校に在籍する日本語指導が必要な外国人児童生徒数は、2008年9月1日現在28,575人で、前年度比では12.5%増加している。(文部科学省 HP: [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/21/07/\\_icsFiles/afieldfile/2009/07/03/1279262\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/21/07/_icsFiles/afieldfile/2009/07/03/1279262_1_1.pdf))
- 5) 矢崎(2004)もクラス内において外国人児童と「日本人児童との良好な交遊関係(=教室内ネットワーク)が形成されていけば、日本語の習得に限らず、外国人児童の情緒の安定や学力の向上にも結び付いていく」と述べている。
- 6) ドナルド・A・ショーン 2007『省察的实践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考』柳沢昌一・三輪建二(監訳) 鳳書房 (Donald A. Schon 1984 *The Reflective Practitioner: How Professionals Think In Action*. Basic Books) を参照
- 7) 本来はクラブ参加可能な学年ではないが、3年生のブラジル人児童2名が途中から自主的にクラブ参加し始めた。

## 文 献

駒井洋 2006『グローバル化時代の日本型多文化共生社会』明石書店

斎藤ひろみ・佐藤郡衛編 2009『文化間移動をする子どもたちの学び』ひつじ書房

田尻英三・田中宏・吉野正・山西優二・山田泉 2004『外国人の定住と日本語教育』ひつじ書房

野山広2008「多文化共生と地域日本語教育支援 — 持続可能な協働実践の展開を目指して —」『日本語教育』138号  
pp.4-13

矢崎光夫「外国人児童と日本人児童とのインターアクションのための日本語支援」『日本語教育』120号 pp.103-  
112

謝辞：本取り組みは、I小学校の先生方、児童の皆さんの多大なご協力によって成立したものです。心より感謝申し上げます。